

白雲片片

第二回

せきとうきせんぜんじ 石頭希遷禪師(二)

今回は石頭禪師、そして馬祖道一禪師、
龐蘊居士の三名が登場する古則を紹介
します。

その昔、釈尊在世中のインドに維摩
居士という方がいました。この方は釈尊
の教えにとても熱心で、在家者であるに
も関わらずその機鋒は文殊菩薩にも勝
るとも劣らないほどであったと伝えら
れています。今回の古則に登場する龐蘊
居士は震旦(昔の中国)の維摩居士と呼

ばれている方です。本来は儒学者だった
ようですが、俗世間での生活を煩わしく
思い、全財産を舟に積んで河に沈めてし
まいました。そして竹箒を作っては娘に
売らせて生計を立てていたそうです(因
みに娘は靈照といい、こちらも禅旨に
通じていました)。龐蘊居士は生涯の間
にたくさんの禅僧に参じていますが、一
応、馬祖禪師の弟子となっていたよう
です。

馬祖道一禪師は法の上では石頭禪師
と従兄弟の關係にある方で、それぞれの
本師である南岳懷讓禪師と青原行思禪
師は共に大鑑慧能禪師の元で修行され
た兄弟弟子です(下の法系図参照)。

正法眼蔵三百則の第五則、

『襄州龐蘊居士、初め石頭に問う、万
法と侶為らざる者、是れ什麼の人ぞ。頭、
手を以つて居士の口を掩う。士、此に於
いて豁然として省有り。又た馬祖に問

う。祖云く、你が一口に西江の水を吸
尽し来らんを待つて、即ち你に向かっ
て道うべし。士、言下に領悟す。』

以上が古則の全文です。

「襄州」というのは中国の地名のこと
で、そこに龐蘊居士という人がいました。
「居士」というのは現在でも戒名の下に
設ける位号として使われていますが、出
家をせず在家者のまま、仏さまの教え
を学んでいる方の中でも特に仏教学の
知識、そして実践が僧侶に匹敵する程の
方を居士と呼びます。

その龐蘊居士が石頭禪師に、私たちの
住んでいるこの世界に実在している多
くの物事(万法)と、共に歩んでいない
人というのはいったいどういう人では
ようか?と質問をしました。龐蘊居士は
万法を超越した、いわゆる仏と呼ばれる
ような人というのはどういう人かと聞
きたかったのではないのでしょうか。実際
には、この世界のたくさんの方事「万法」
と共に歩んでいない人など釈尊を含め、
一人もいないのですが、あえてそういっ

た人はどういう人かと質問しました。

すると石頭禪師は自分の手で龐蘊居士の口を塞いでしまったのです。なぜかと言いますと、石頭禪師は龐蘊居士の質問が頭の中で考え出した、とても抽象的な内容であるという判断から口を塞いで注意したのです。

釈尊が坐禅を通じて至った境地・教えの中には、例えば死後の世界はどうなっているかといったような、考えたところで分かり得ない、むしろ不安や恐怖、心配を誘いそうなことはあまり考えるべきではないということが含まれてます。

「莫妄想」^{まくもうぞう}、「妄想すること莫れ」^{なか}の禅語は有名ですが、石頭禪師は龐蘊居士の質問が、考えるべきではない内容に思えたので、そんなつまらんことは言うな！と言わんばかりに龐蘊居士の口を塞ぎました。すると龐蘊居士は、なぜ石頭禪師が自分の口を塞いだのかがはつきり分かりました。

そして龐蘊居士は同じ質問を馬祖禪師にもしてみました。すると馬祖禪師は「お前が一口で西江の水を飲み尽くしてまたここにやって来たらその質問に

答えてやろう」と答えました。西江というのは川の名前だと思われませんが、人間が一口で川の水を飲み尽くすことなどありえませんが、馬祖禪師はここで「お前さんの質問は、わしがした返事ぐらい滅茶苦茶な、頭の中で考えた抽象的な内容なんだ」ということを暗に諭しました。そして龐蘊居士は馬祖禪師の言葉を聞いてなぜそのような返事をされたのかが分かったのです。

龐蘊居士は頭に頼りすぎた質問を両禪師にしてしまいました。古則に登場した両禪師は龐蘊居士の仏道への熱意・素質を壊してしまわないように、ストレートな返事をせずに遠回しに指導されたのです。

仏教の開祖・釈尊は幼少の頃より抜群の観察力、思考力を持つていた方なのですが、若い頃はご自分の能力・過敏な精神状態のせいで苦しまれました。なぜなら、通常ならば考えなくてもいいこと

を深く考えて神経質なまでに悩んでおられたからです。四門出遊の話などからはそういった様子が感じ取れます。思考する能力に頼りすぎると、妄想や期待、欲望といったものが方向性を失って現実と乖離し、時には足枷となってその人の一生を狂わせ、場合によっては周りに迷惑をかけることになりかねません。

釈尊が坐禅をし、自分や大宇宙に身を任せ、これこそが、自分を正常な状態に整え、心と身体の均衡を保つ最高の方法であることを発見されたのは、極端な精神状態を体験され、一切を明らかにしたという諦めない強い熱意を持ち続けられたからではないでしょうか。

龐蘊居士は多くの禅僧に参じ、歴史に名を残す居士となりました。過去の祖師方も、頭に頼りすぎるのは危険であると気付き、やめたのです。

よく頭を使ってより早く、正確に、便利にといったことを教えられてきた私たちにとって、とても参考になる古則ではないでしょうか。参考文献「西嶋和夫

著真字正法眼藏提

唱上卷一」。

